

『初桜』 咲かち、

咲かち、花や咲かち！

清水寛二

「花ト、面白キト、メヅラシキト、コレ三ツ
ハ同ジ心ナリ」《花伝第七別紙口伝》
「してみてよきにつくべし せずば善悪定め
がたし」《申楽談儀》 — 世阿弥

私は昨秋 師観世寿夫（一九七八年没）の著書『観世寿夫 世阿弥を読む』（二〇〇一年発行・荻原達子編）をゆつくりと読む時間を得た。この本では能の始祖世阿弥の伝書や作品から、能がいかなる演劇かを述べ、現代の舞台芸術が置かれている状況を鋭く問い、能役者が古典継承のため単に修練を積むだけでなく、現代芸術としてどうすれば多くの観客に認めて貰えるかを書き起こして、月日を超え今日の問題として迫ってくる。

その巻末解説を横道萬里雄先生が書かれているが、「この原稿の執筆中に、大城立裕氏から『真珠道（マダマミチ）』という新著を頂戴した。書名に「琉球・楽劇集」と頭書してある。……組踊は五十番以上の台本が存在するが、常用のものは二十番足らずで、それも旧王朝崇敬の主題や、敵討を題材とするものが大部分、現代の上演に耐え

る演目は少ない。国立組踊劇場の建設も始まり、作品の整備という点でも新作の可能性が模索されている。伝統維持を梃として見られるかに見える沖縄でも、動きが興っている」という部分がある。

私はこの『真珠道』の舞台を拝見した時の感動が忘れられない。美しい場面、楽しい場面、そして静かな終結部の「真珠道今日や かにん遠さ」のなんと悲しいことであつたか。

大城先生は『真珠道』以降も、傾向の異なる新作組踊を精力的にお書きになり、その多くは上演され、『花の幻―琉球組踊十番』や『真北風が吹けば―琉球組踊十番』などのご著書となつている。中には「組芝居」と名付けようかと思わせる現代劇もある。しかし、それをあえて「組踊」と唱えて書き続ける・上演され続けることがとても大事なことであり、まさに「してみてよきにつくべし」なのだろう。

また、『花の幻』のあとがきで大城先生は「沖縄県立芸術大学音楽学部組踊コースのOBたちによる作品も生まれた。彼らは、立方、地方として拙作の上演にもなくてはならない存在になつた

し、私が願う伝統の発展的継承に心強い同志である。私の場合、作劇術の上で現代演劇の手法を援用したので、演技者に新しい感性、知性を求める必要も生じ、その意味でも彼らとの伴走は嬉しいことである。」と述べていられる。

世阿弥は「能の本を書くこと、この道の命なり。」《風姿花伝第六花修》と、戯曲を書くことを役者の大きな課題としている。玉城朝薫の五番も実験的な新作であつた。単にスタイルとしての古典のもじりやきれいなことに収まらない現代の戯曲（題材は古くとも）を上演する―これが私たち現代の楽劇役者に課せられた大きな課題だろう。

『*スイミー』が繰り返して上演されていると聞くといつか僕も海月の役でユラユラ出ていきたくないな』と思つたり、シエイクスピアの『真夏の夜の夢』を見て、山原の山羊や薩摩武士の亡霊が出たあの方がリアリティあつたなと思つたり。

さて、師の本に鼓舞され、私はこのところ積極的に劇場に観客として足を運んでいる。現代劇からオペラ、コンサート、ダンスや舞踏、舞踊などの舞台を見ていると、自分の身体が生き返るような感覚を得て、やつぱり《劇場は素敵だ！》。

幸い琉球舞踊もちょうど東京の国立劇場と横浜能楽堂での二公演があつた。それぞれ佐藤太圭子師と宮城能鳳師を中心とした古典と創作の舞踊で、若いメンバーも活躍する生き生きとした舞台が私の元気を大いに掻き立ててくれた。その「佐藤太圭子の会」のパンフレットにも、大城先生は

る演目は少ない。国立組踊劇場の建設も始まり、作品の整備という点でも新作の可能性が模索されている。伝統維持を梃として見られるかに見える沖縄でも、動きが興っている」という部分がある。

私はこの『真珠道』の舞台を拝見した時の感動が忘れられない。美しい場面、楽しい場面、そして静かな終結部の「真珠道今日や かにん遠さ」のなんと悲しいことであつたか。

大城先生は『真珠道』以降も、傾向の異なる新作組踊を精力的にお書きになり、その多くは上演され、『花の幻―琉球組踊十番』や『真北風が吹けば―琉球組踊十番』などのご著書となつている。中には「組芝居」と名付けようかと思わせる現代劇もある。しかし、それをあえて「組踊」と唱えて書き続ける・上演され続けることがとても大事なことであり、まさに「してみてよきにつくべし」なのだろう。

また、『花の幻』のあとがきで大城先生は「沖縄県立芸術大学音楽学部組踊コースのOBたちによる作品も生まれた。彼らは、立方、地方として拙作の上演にもなくてはならない存在になつた

「古典舞踊も古典音楽も、はじめはみな創作である。……洗練を重ねるうちに、古典として昇華し、その型が確立、継承された」と述べられている。嬉しいことに今月は半年ぶりに沖縄で舞台を拝見できる。しかし、この新作組踊『初桜』も『真珠道』以上に厳しいテーマのようなのだ。元氣な時に行くべきだろうか。いや、私をして、この十年余り沖縄のいろいろな舞台を見続けさせているのは、嘉数道彦さんをはじめ若い役者達が単に古典を尊び、その技法を使つてみようという好奇心だけでなく、自分たちの前には「今を生きる自分たちが表現するべき道が広がっている」という確信と喜びを感じるからだろう。楽しい作品から生

と死に迫る新たな組踊への挑戦、待っていました。その舞台の充実をこちらの喜びに、「いざ参らん」と思う。

現代を直接のテーマにした新作を作るのは、やはりむづかしい。新たな考え方も必要になる。世阿弥も朝薫もそれ以前の芸能を改革し、他の芸能からも「珍しき」を導入し、新たなスタイル、自分達の芸能を作つた。

まずは「珍しき」が「面白き」となり、「時の花」を咲かせ、やがて「真の花」となる。

そうだ、『十六夜朝顔』でも花が咲く。今でも十六夜の月が空にかかると、嘉数さんが解説で「そんな伝説は実はないのです。」と言われたにもかかわらず、つい「そうだ、朝顔を探して願い事をしよう」と毎回思つてしまう私がいる。

さあ、花や咲かち咲かち。

さあ、花や咲かち咲かち。

※「楽劇」＝日本及び東洋諸国の伝統的芸能などで、演劇・音楽・舞踊などの要素が不可分に統合した総合芸術。この言葉の用い方は横道先生が提唱された。

新作組踊
「組踊版・スイミー」

作・演出／嘉数道彦
振付／阿嘉修
音楽／仲村逸夫
絵本「スイミー」を元にした作品。舞台は沖縄近海、小さい魚たちが力を合わせ敵討物のスタイルで組踊の様式を楽しく描いて好評を呼び再演を重ねている。

喜劇の歌舞劇
「真夏の夜の夢」

作・演出／嘉数道彦
振付／阿嘉修
音楽／大島保合
名作「真夏の夜の夢」の翻案。琉球王国を舞台に繰り広げられるファンタジックな恋の物語。同じくシエイクスピア作品を換骨奪胎した喜劇の歌舞劇「ロミオとジュリエット」もある。

新作組踊
「十六夜朝顔」

作・演出／嘉数道彦
振付／佐辺良和
音楽／新垣俊道
地元新聞で連載後に初演された作品。伝統組踊の様式を土台に親子・家族の絆を丁寧に描いて世代を超えて受け入れられ、東京の国立劇場でも好評を博した。

（しみず かんじ）
一九五三年奈良県生まれ。能役者（観世流鏡仙会）、故観世寿夫・故八世観世鏡之丞らに師事。
東京芸術大学非常勤講師。多田富雄作の新作能『長崎の聖母』・『沖縄残月記』などを上演。
南京朱鷺国際演劇祭にて中国の崑劇などと交流。現代劇などにも参加。